

「教授技法に関する分析的研究—特に指示の仕方を中心として—」

広島大学大学院 田 邊 祐 司

1. 本研究の概要

一般にベテラン教師の授業と教育実習生（以下教生）の授業を比較し、両者の授業間にあらわれる差異はただ単に経験の違いから生ずるものとするのは容易なことである。だが両者の授業のどの部分が、どう違うのかを考えてみると、そこには経験年数の違いという単純な図式ではうまく割り切れない複雑な教師の営みが隠されていることに気づく。

本稿は、このベテラン教師のモチ味が如実にあらわれる教授技法、いわゆる指導技術の一つである「指示の仕方」に着目し、この問題にアプローチを試み、われわれの共同研究の目的である質的授業分析に一つの視点を提起するものである。

なお、ここでわれわれが考える「指示」とは、「教師の指導的行動のうち、具体的な言語行為」（小川 279）であり、英語の *direction*, *cue*, *signal* 等の *directives* のことである。さらに、いわゆる *Classroom English* (以下 CE) による指示も、この中に含め論考を進める。

2. 英語科授業における指示

英語科の授業は他の教科の授業と比較した場合、若干その性格を異にしている。中でも著しいのが、そのドリル的側面である。土屋 (29) の指摘するように、英語科の授業では、ある程度のドリルは不可欠であり、円滑な授業運営のためには、教師は常に「何をすべきか」を生徒に明確な形で提示しなければならない。したがって、生徒に教師の意図する行動を起こさせる最初のステップである指示は、英語科授業においては、何よりもまして、授業の成否にかかわる重要な指導技術の一つであると考えられる。

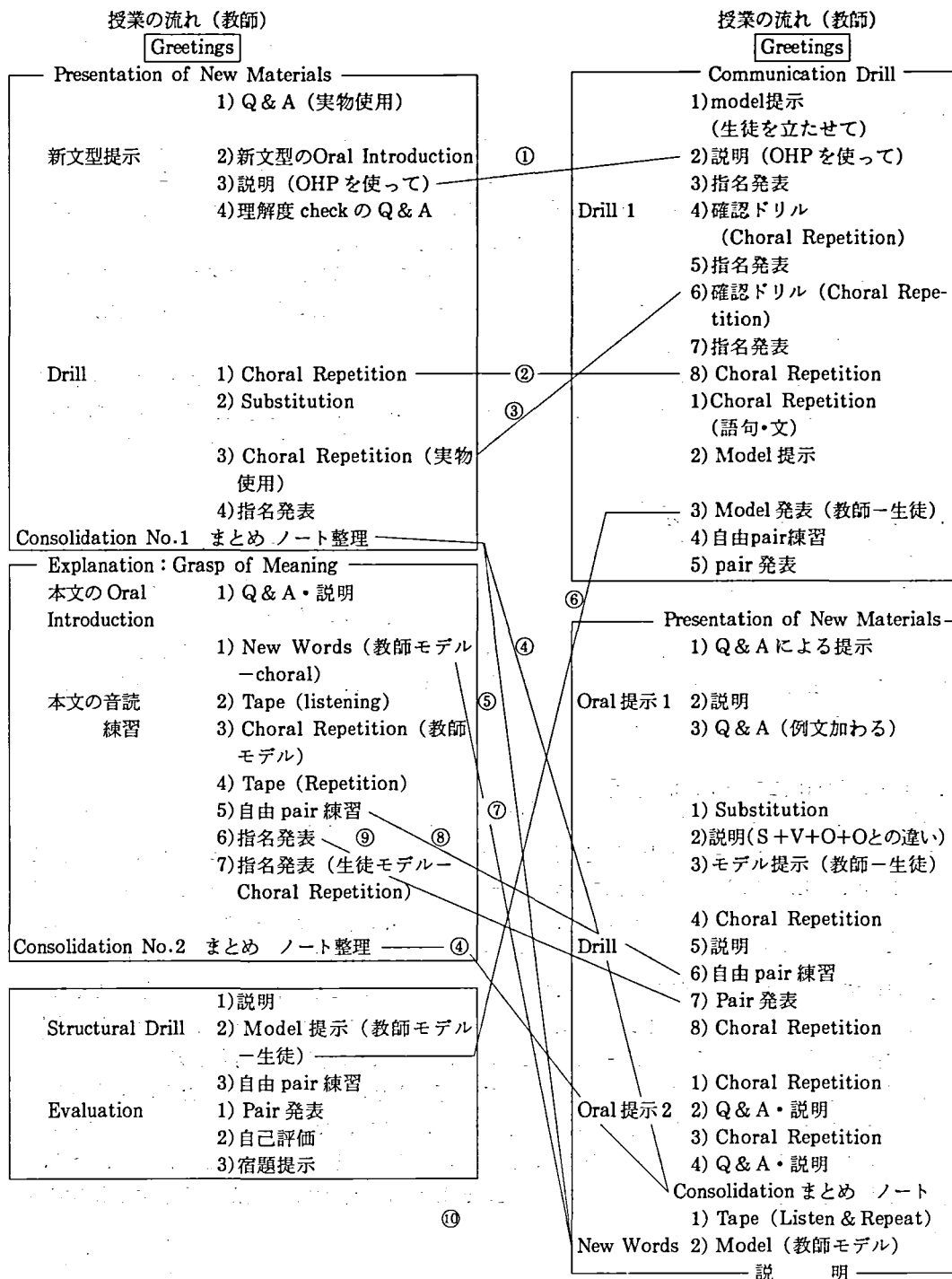
3. FIAC, FLint にあられる指示

それでは、英語科授業において重要な役割を演じる、この指示に関して、既存の授業分析システムは、どのようなデータを提供してくれるのだろうか。最もポピュラーなシステムの代表格である FIAC, FLint にみられる指示に関するデータの詳細は、馬本・坂本両論文に詳しいが、簡単に述べるとこれら既存のシステムから、われわれは確かに数値的なデータを得ることはでき、又、マトリックス上のデータの比較から、指示に関する授業者の大まかな教授行動を推察することは可能である。しかしながら、考えなければならないのは、こうしたシステムの与えてくれる overt な指示行動のデータの向こう側にある covert なデータではないだろうか。つまり、大切なのは指示に関する単なる数値データだけではなく、どのような指示が、授業の流れのどの段階で、どうおこなわれ、それが教授目標との関連で、どのような教育的機能を果たし、生徒がどう反応したか等といった授業の構成にもっと深く関わるデータではなからうか。われわれの立場は、既存のシステムが与えてくれるものの他に、指示を単なる数値という切り離された形ではなく、授業の中で有機的なつながりを持つものとして、holistic に分析する必要があるとするものである。

4. 分析方法

ここまでの共同研究の他論文同様、ここでも同一の2つの授業を分析・比較の対象とした。方法としては金田にある intuitive なプロトコル手法を用いて、録画された授業を忠実に transcribe

図 1



し、指示に関する項目を抽出し、これを複数の教師の目で吟味した。なお、教授内容の違いを両授業を比較するための条件として、図1にあるように、両授業に共通の授業段階を選びだし、それぞれの段階における指示行動を比較することにした（各段階は①、②といった番号であらわされている）。

線で結ばれた各共通段階はそれぞれ次のようになる。

- | | |
|---------------------------------|------------|
| ①新文型の提示後の説明段階 | ⑥対話モデル提示段階 |
| ②説明後の choral reading 段階 | ⑦新出単語提示段階 |
| ③ Drill 練習の前の choral reading 段階 | ⑧新教材対話練習段階 |
| ④ノート整理段階 | ⑨生徒による発表段階 |
| ⑤ノート整理後の段階 | |

なお、両授業に共通のものではないが、特に教師のうまさが高くあらわれている段階である以下の段階もあわせて分析した。

- | | |
|---------------|----------|
| ⑩宿題提示段階 | ⑬本文の導入段階 |
| ⑪導入部における訂正の段階 | ⑭個人発表段階 |

これらの段階に応じて、具体的指示言語等を、授業の流れ及びコメントとともに、記したのが資料1である。

5. 分析結果

授業中における教師及び教生の指示を、以上の角度から分析検討した結果、次のような結果を得ることができた。

- (1) 新しい行動に入る前に、教師は生徒に次に何をするのか、まず簡単に提示し (naming, framing), 次により具体的な行動を指示している。例えば、大きな授業の切れ目である①をみると、新文型を提示した後、OHPを使って文型の文法的な説明をおこなうのだが、教師の方はきちんと順序立てて、指示を与えている。これに対して教生の方は、やや唐突に次行動に入っている。これは、ドリル練習の段階である③、ノート整理段階である④等の他の段階でも同様に確認できる。教師は、授業の流れをしっかりと見据えて、生徒に余計な混乱を引き起こさないように順序立った指示を与えているが、教生の方は時として、フィーリングで処理しており、この違いこそ授業全体のリズムに決定的な影響を及ぼしている。
- (2) 授業のポイントをしっかりと踏まえた指示をおこなうことは授業のイロハであり、教生も、もちろんこれは十分に承知していると考えられるが、この点においても、両者は大きなひらきみせている。教師は、授業の押さえの marker として、指示を有効におこない、例えば④において、どの文章をノートに残して欲しいかを適確に指示しているが、教生の場合、「ノートする人、ノートとって」と生徒まかせの指示をおこなっている。教生の場合、こうした焦点化の指示が、はっきりしないことが資料からもよくうかがわれる。
- (3) (1)で述べたことと関連するが、授業の移行段階における指示に関するもう一つの大きなひらきは、教師の場合、適切な指示がほとんど CE でなされていることである。この CE については、後でふれるが boundary marker として、授業の切れ目をはっきりさせ、授業のスムーズな流れに寄与している。
- (4) 授業に緩急をもたせる意味でも、刺激・注意喚起に関する指示は、重要であるが、教師の授業の場合、これらの指示が実にうまいタイミングでなされている。又、これらも CE が多い。③を例にとると、ここは新文型を説明した後、ドリルをおこなわせ定着をはかるうとす

る大切な段階であるが、教師は生徒の注意を集めながら、うまく次行動へ流れる指示をしているが、教生の場合、粗雑な指示を出していることがわかる。

以上の点と重複するかもしれないが、教師の指示の仕方には、全体を通して、次のような発話形態に関する補足的特徴も確認できた。

(5) 簡潔さ

教師の指示は適確で、何を要求しているのかはっきりとわかる。これに対して、教生の場合、時としてダラダラと要を得ない指示をしていることが多い。

(6) delivery の仕方

これは文字からうかび上がってこないが、教師の場合、指示を出す際、声の調子、間のとおり方等の側面に多くの注意を払っていることが検証された。

教師と教生の指示行動の比較から、以上の点における相違点を確認することができた。先に述べたように、FIAC、FLint等のシステムが与えてくれるものも、もちろん授業を改善する上で重要なデータを提供してくれるのではあるが、授業という人間の営みを考える場合、このような視点からのアプローチも無視することはできないのではないかと考えられる。人間行動を数値であらわそうとする方法をデジタル思考と呼ぶならば、われわれが今回とった方法はアナログ思考のものである。人間的な営みである授業という行為の本質を、何らかの形で捕捉しようとする場合、デジタル思考だけからは見えてこない部分が多いことをこの分析結果は示唆しているように思える。

最後に、指示のCEについての分析結果を述べる。この2つの授業で使われた指示CEを、授業の流れに沿ってまとめたのが資料2である。

FLintからは、われわれは使用言語比率というデータを受け取ることができ、それを基にL1、L2の使用比率の観点から授業を分析することは可能になった。だが、そのCEが授業の全体の流れの中で、どのように生かされているのかはこのFLintからはわからない。ところが、われわれの今回の分析からは、指示CEに関して、新たなデータを得ることができた。資料2を見ると、教師と教生の指示CEの差異は一目瞭然であるが、教師の場合、各段階に合わせて、様々な意図を持ったCEが使われていることがわかる。つまり、新しい活動に入るための注意喚起のCE (attention-getter)、活動に合図を与えるCE (cue)、活動を促すCE (command)等のCEが、授業活動の重要な領域に及んでいることが検証できる。これは「ある点に向けさせ→どのような行動をすべきか提示し→実際行動を起こさせ→行動時に適切な合図を送り、コントロールし→行動を終結させ、まとめ→次なる行動へ移る」という図式の中で、見事にCEを活用させているということである。さらに、授業の各段階のboundaryの前後にこのCEを使用することによって、ともすれば単調になりがちな行動に変化を与え、アクセントのある授業にし、いわゆる「英語科授業の英語化」につとめていることもこの分析から結論づけることができる。池浦(12)は「教室英語はコミュニケーション実践の宝島」としており、CEを中心的役割を担うものと位置づけているが、われわれはさらにCEを全体の授業の中で、再検討する必要があるのではあるまいか。

6. これからの課題

指示の仕方という視点に立って、教師と教生の授業の質的差異に迫ってみたが、今回のわれわれのアプローチによって、既存のシステムだけではうまく掘えることのできない授業の深層構造に一步近づくことができたのではないかと考える。だが、指示の仕方というのは複雑な授業構成要素のほんの一分野であることは否めない事実である。これから教授技法の他の分野、ひいては

授業全般の他の諸側面に関して、デジタル思考からは見ることのできない「授業の事実」を、アナログ的な立場から、じっくりと分析してみたいと考える。

〔参考文献〕

- Brazil, David, Malcolm Coulthard and Catherine Johns, *Discourse Intonation and Language Teaching*. London, Longman, 1980.
- 五十嵐二郎 『英語授業過程の改善』東京 大修館 1982.
- _____ 『指導過程の実際』『新・英語科教育の研究』東京 大修館 1985. pp.188-194.
- 伊藤健三, 伊村元道(編) 『英語教師の常識(I)』東京 大修館 1986.
- 池浦貞彦 「クラスルームイングリッシュと音声指導」『現英教』7, 1987, pp.12-13.
- 金田道和(編) 『英語教育モノグラフ・シリーズ 英語の授業分析』東京 大修館 1986.
- 日比裕・重松鷹泰 『授業分析の方法と研究授業』東京 学研 1978.
- クラーク, H.H., E.V.クラーク, 堀口俊一監訳 『言語と心理 聞くこと・話すことのメカニズム』東京 桐原書店 1984.
- 三浦省五(編) 『英語教育モノグラフシリーズ 英語の学習意欲』東京 大修館 1983.
- 永野重史(編) 『講座・英語教育工学 第2巻 教育・学習の過程』東京 研究社 1975.
- 中島文雄(編) 『英語授業 講座 新しい英語教育III』東京 大修館 1976.
- 納谷友一 「学習の雰囲気づくり」『現英教』16,1,4(1979)18-23
- _____ 「入門期の指導」『現英教』16,1,4(1969)24-29
- 小川芳男(編) 『英語教授法辞典 新版』東京 三省堂 1982.
- 大沢 茂 『現代英語科教育法の研究-学習心理的考察-』大阪 大阪教育図書 1960.
- 小篠敏明 「授業分析・評価の視点-中学校英語科の場合」『中国地区英語教育学会研究紀要』17(中国地区英語教育学会, 1987)
- _____ 「英語科教育学の授業実践」『教科教育学研究-第2集』(日本教育大学協会研究促進委員会, 1985), pp.219-241.
- Richards, Jill. *Classroom Language: What sort?*. London, George Allen & Unwin, 1978.
- Rivers, Wilga M. *Teaching Foreign-Language Skills*. The university of Chicago Press, Chicago and London Toppan Company, Limited Tokyo Japan, 1970.
- Sinclair, J. McH. and D. Brazil. *Teacher Talk*. Walton Street; Oxford, Oxford. Univ. Press, 1982.
- 小学校学級経営研究会 『教師必携実践資料③ 効果のあがる学習指導』東京 日本文化科学社 1985.
- 染田屋謙相 『教室で生きる小さな教育学』東京 学陽書房 1987.
- 辰野千寿他編 『実践教育心理学③ 授業の心理』東京 教育出版 1981.
- 田邨祐司 「授業言語分析法の意義と限界」『中国地区英語教育学会研究紀要』17(中国地区英語教育学会, 1987)
- 橋 健 『意欲を起こさせる英語指導』東京 大修館 1982.
- 土屋澄男 『英語指導法叢書 英語指導の基礎技術』東京 大修館 1983.
- 吉本 均 『教育新書⑤ 授業成立入門』東京 明治図書 1985.
- _____ 『講座 授業成立の技術と思想④ 教授行為と能動的学習の成立』東京 明治図書 1984.

資料 1

(Tは教師, Sは生徒, 下線部は指示発話を表す)

	授業の流れ	[教師]	コメント	授業の流れ	[教 生]	コメント
①	導入部。新文型を様々な提示物に即して口頭提示した後、OHPを使いながら説明段階へ移行。	T: <u>今たくさん出したけど、今のをね、日本語でどういう意味かというのを考えてみましょう。</u> <u>Look at the screen.</u> (OHPをつける) Firstね。This is the ring my husband gave me. いいですか。この図を見て、 <u>矢印を見てどういう意味になるだろうか。さあ、誰か。</u> <u>Please say in Japanese.</u>	次の活動段階に移る前に、何をすべきかははっきりと明示している。(Framing, Naming) この教師の授業では、簡単な行動を求める指示はほとんど英語である。Framingを再び繰り返して、行動をさらに促している。	Drill. model 提示の後	T: ...The bus stop is across the street, across the street. OK? (OHPの地図) <u>それではちょっとOHPを見てくれ。最初ちょっとやってくるように言ったな。最初ちょっと難しいかもしれないけど。</u> 駅前から始めて・・・Go along this street.	OKから間もなく、次発言へ移っている。その後の指示は何を求めているか、はっきりしない。
②	導入部。説明が一通り終わった後、口頭での定着作業へに入る。	T: はい、じゃあ。Let's read together. <u>Repeat after me.</u>	間髪を入れず、スピードのある指示により、新文型のchoral repetitionへと移行。	Drill 個人→全体 Choral Repetition	(生徒の発表の後) T: ちょっと、みんなで繰り返してみよう。	タイミング的には良い指示であるが、Classroom Englishを使えばもっと良い雰囲気が生まれるのでは。
③	導入部。Substitution から再び元の文型に戻り、今後は、生徒に実際に物を持たせながら、口頭発表。この分節のまとめの段階へと移ろうとしている。	T: OK, じゃあ少し drill, 練習してみたいと思います。 <u>え〜。Listen to me carefully, 後で又、持ってもらって言ってもらいますのでしっかり英文を聞いて、Repeat after me, OK?</u>	教卓の前へ出てきて、全員へはほえみかけながら、物を手に持ちながら、次の行動を明確に指示。	Drill. 再び model を提示後	T: <u>こういう要領でやってみよう。</u> 一番向こうはどこだったかな? <u>museum</u> か、 <u>オイ、ちょっとやってみよう。</u> 〇〇、これにあてはめてな。(指名) <u>自分でやってきたのでいいぞ。</u>	具体的にドリルの最初の指示。もっと具体的に言うこともできるのでは。親しくするのはよいが粗雑な指示の出し方である。OHPに従うのか。自分なりの発表するのか。これでは生徒は迷ってしまう。

授業の流れ	[教師]	コメント	授業の流れ	[教 生]	コメント
④ 導入部。この分節の整理。OHPに書かれた新文型をノートに移させる。机間巡視。	T: はい、じゃあ、Please write these sentences. 見えますか。 はい、two sentences, そして、もう一つね。これしました。 cap でもいいし、clock でもいいし、pencil case でも dictionary でもいいですから、もう一つだけ書き加えておいて下さいね。あの2つと、この物の sentence.	指示をしたとたん、生徒はノートに書き始める。従って、雑音もいろいろと起こるが、その分だけ声も大きくなり、補足提示をしている。	新教材まとめ。ノートに清書。	(以上の説明の後) T: ノートする人、ノートとって。 はい、ここまで、何か質問。何か質問。いいですか。	「ノートする人、ノートとって」という指示は非常にあいまいである。これは強制すべき指示ではないか。
本文の整理。ノートに清書。	T: はい、Please draw underline s. (黒板の文を指示しながら) これ、Mine was a watch he bought in Switzerland. と Let's try on the dresses Father bought us, Mother. それと last sentence. They looked at themselves in the mirror for a long time. They are very important sentences. Please learn by heart.	授業の boundary. はっきりと次の行動を簡潔に指示している。大きい声で、今一度基本本文を読み、焦点化にかかっているのがよくわかる。最後に再び、念を押すように、暗記の指示が行われる。これらの指示はスムーズに、なおかつ的確に行われている。			

[教師]

[教 生]

<p>⑤ 本文の学習へと移る。 Oral Introduction へ。</p>	<p>T : <u>Now, stop writing. Stop writing. Please look at the blackboard. (control)</u> <u>Now, we are going to read 'From Mike's Diary, 'From Mike's Diary' (Framing)</u></p>	<p>この教師は新出単語。分節の始まりにはほとんど英語を使用し、はじめの stop writing でこれまでとガラリと調子を変え、コントロールしている。2 番目の Now から は、さらに音量が上がり、黒板を棒で指しながら注意喚起を行い、新しい活動への移行をはかっている。</p>	<p>新出単語。</p>	<p>T : はい、それじゃ、教科書 page 45. <u>New Words.</u> ↓ (Tape) (Listen & Repeat)</p>	
<p>⑥ 言語活動。一人の生徒とともに model を提示。</p>	<p>T : はい、いいですか。 <u>じゃあ、1 回だけやってみようか？</u> <u>ええと、〇〇くん。B やって下さいね。</u> <u>先生がAね。</u></p>	<p>親しみのある態度、言葉でモデル提示を指示。</p>	<p>Drill. (対話への移行)</p>	<p>(対話の仕方を示す) T : <u>それでは、ちょっとやってみようかな。</u> <u>右の地図を見て、え〜とね。ここ書いてあります。会話したいんよね。地図みてね。</u> <u>今、市役所前におるとしようや。</u> <u>City Office という。地図が、OHP でやろうとしたんやけどな、書けんかった。(笑いながら) あんまり、細々しすぎとって、紙屋町・・・</u> <u>じゃなかった市役所前からな。</u> <u>広島市民球場に行きたい。</u> ↓ (対話 model 提示) ↓ <u>こういう具合にこれを使って、会話してほしいんです。</u> T : <u>ちょっと、え〜とね。1人・・・、(指名)</u> <u>本通りまで行ってみて下さい。</u> <u>僕がAになります。あなたはBになって下さい。</u> <u>本通りまで行って下さい。</u> <u>これにあてはめて下さい。</u> (OHP を指して)</p>	<p>指示がダラダラとして何をやらいいのかわからない。途中で話がそれている。もっと簡潔に指示をしようと思えばできたはずであるが、なぜか言葉が乱れている。 指名するつもりなのに生徒の名前を覚えていないのか、かなり手間どる。最終的な行動を表わす結果が一番最後に出ている。</p>

[教 師]

[教 生]

<p>⑦ 本文。QAの後、本文の説明を行い、新語句の音読練習へ移る。教師 (model) → Choral.</p>	<p>T : <u>それじゃ、Please open your books to page . . . 24.</u> <u>Let's read together. Let's read new words. Repeat after me.</u></p>	<p>小分節の切れ目はやはり、英語による指示である。「読みましょう。新出単語をね。」と具体的に行動を指示している。</p>	<p>新出単語。</p>	<p>T : <u>はい、それじゃ、教科書 Page 45.</u> <u>New Words.</u> ↓ (Tape) (Listen & Repeat)</p>	
<p>⑧ 本文。音読練習 (Tape → リスニング、教師 → コーラル repetition, Tape → コーラル repetition) の後、自由読みへと進む。 ↓ 机間巡視</p>	<p>T : <u>はい、Please read by yourselves three times, three times.</u> <u>で、ラストの Fourth time はパートナーに聞いてもらって下さい。</u> <u>いいですか。で、パートナーは必ず one comment ねっ。ここはもうちょっと、というのを言ってあげて下さい。</u> <u>はい、スタート。Read. すんだら前へ向いて下さいね。</u></p>	<p>まず、英語で活用内容を指示。3回ということ念押しする。この音調子は、ゆっくりと全体に語りかける調子になっている。つづいて、方法手順を簡潔に指示している。少しだけ競争意識をかきたてる指示も行っている。</p>	<p>新教材。対話練習。</p>	<p>T : <u>はい、それじゃあ。みんな。その場にいろいろなものがあるな、たとえば、机でもいいです。何でもいいんです。カバンでもいいです。これを使って練習して下さい。</u> <u>会話練習して下さい。</u> ↓ (机間巡視)</p>	<p>指示が長い。具体的な行動は最後に出てくる。</p>
<p>⑨ 本文。自由読み終了。個人発表。</p>	<p>T : <u>はい、それでは何人か読んでもらいたいと思います。</u> <u>はい、anyone?</u> <u>半分ずつ行きますからね。</u> ↓ (指名)</p>	<p>全員に向かって、生徒を見ながら、ニコニコとやさしく微笑みかける。生徒の手が上がるのを、じっとやさしく待つように。簡単に本文の半分だけという指示も与えている。</p>	<p>新教材。ペア発表。 Drill。対話の導入。モデルの提示後。</p>	<p>T : <u>はい、いいですか。やめて下さい。誰か . . . はい、誰かやして下さい。みんなできるまで、ちゃんと、やってみようや、はい。</u> <u>誰かいませんか。誰かいませんか。</u> <u>はい、誰かいませんか。勇気出してやってみようや。</u></p> <p>(対話モデルの提示の後) T : ok. <u>こんな具合にして対話して下さい。</u> <u>はい、練習して下さい。</u> <u>ペアで練習して下さい。自分のペアでもいいです。</u> <u>ペアで練習して下さい。</u> ↓ (ペア練習) → 机間巡視</p>	<p>生徒の自主的な発表を待つというのは、良いかもしれないが、待ち過ぎてはいけない。「はい、いいですか」から「やめて下さい」まで、ほとんど間がない。</p> <p>ペアで練習するんだという指示をはっきりと最初にすべきである。生徒は、がやがやいって、取りかかるまで少し時間がかかる。「自分のペアでも」という発言は、ここでは混乱を招く。</p>

[教師]

[教生]

<p>⑩ 整理。Homework の提示。</p>	<p>T : それでは homework は今対話をしましたね。 それをノートに記入して下さい。 で、次の時に、ええ～Monday にノートを全員に提出してもらいます。 どんな対話をしたか、先生見たいと思います。 All right? はい、それでは評価カードに記入して下さい。</p>	<p>最後の指示。特に homework というところは大きな声になっている。</p>			
<p>⑪ 導入部。実物を持ちながらの口頭発表をした生徒がたった場面。</p>	<p>T : ちょっと、今のねえ。○○君のね直してあげましょう。いい? 「私の友達が東京で買った」にするのですよ。ね。じゃあ、落ちついて。うん。 Once more, please.</p>	<p>やさしく、困った生徒を助けるように。やわらかい言葉使い。困った生徒に語りかけるように、ゆっくりと接する。生徒ができれば、すばやく repetition を英語で求めている。</p>	<p>Drill。生徒の発表を訂正して。</p>	<p>T : You'll find (×2) 「～が見えますよ。ありますよ」ちょっとそこだけ、もう一回、それ直して言ってみてくれ。 ↓ S : Go along this street and turn right at the third corner. You'll find museum is on the left. ↓ T : You'll find (×2) the museum on the left. You'll find museum がみえますよ。それで On the left. 左っ側に。 はい、You'll find だけ直して ↓ S : You'll find museum on the left. ↓ T : OK. Good. よろしいですね。 そういう要領です。</p>	<p>訂正であるが、元気がよすぎて、早く、わかりにくい。 直してみただけでは、なぜおかしいのが生徒にはわからないまま。</p>
<p>⑫ 本文。Oral Introduction の前。</p>	<p>T : And now we are going to read Mike's Diary, Mike's Diary. I will tell you today's Mike's Diary. Listen to me carefully. And after that, I'll ask you some questions, and answer in English or in Japanese. OK? Please close your books.</p>	<p>自らの日記を読んだ後、再び framing move を行っており、生徒が次に何をすべきかも指示している。質問があると知った生徒は、一層注意して教師の Oral Introduction を聞くようになる。</p>	<p>新教科。S V O C</p>	<p>(間がある) T : それでは、～ちょっと、今日、新しいとこ入ります。○○, Stand up. What is your nickname, please?</p>	<p>教科書と TP シートを持ちかえながら、下を向き、生徒の方は見ないで、ここは授業の大きな分節であるが、何の変化もつけていない。いきなり指名をする。</p>

[教師]

[教生]

<p>⑬ 本文。 自由読み終了。 個人発表。</p>	<p>T: はい、それでは何人か読んでもらいたいと思います。 <u>はい、anyone?</u> <u>半分ずつ行きますからね。</u> ↓ (指定)</p>	<p>全員に向かって、生徒をみながらニコニコとやさしく微笑みかける。生徒の手が上がるのを、じっとやさしく待つように。簡単に本文の半分だけという指示も与えている。</p>	<p>Drill。 対話。 ペア発表の前。</p>	<p>T: はい、いいですか。誰かやってみてください。 <u>回ってみたら、みんなちゃんといけるみたいだから、誰がやってもいいはずですよ。</u> <u>やってみなさい。</u></p>	<p>大きな声で生徒はまだ終わっていないのか、ガヤガヤやっている。</p>
------------------------------------	---	--	-----------------------------------	---	---------------------------------------

資料 2

教師の Classroom English

〔新文型の提示〕



〔新文型の理解〕



〔新文型の音読〕



〔新文型の整理〕



〔本文の学習〕



〔本文の確認〕



〔本文の理解〕



〔本文の音読〕



〔本文自由読み〕



〔本文発表〕



〔本文の整理〕



〔Structure
Drill〕

1. Look at the screen.(attention-getter)
2. Listen to me carefully.(attention-getter)
3. Please say it in Japanese.(command)
4. Let's read together.(direction)
5. Repeat after me.(cue)
6. Once more, please.(cue)
7. Please write these sentences.
8. Stop writing.(command)
9. Please look at the blackboard.(attention-getter)
10. Now, we are going to read From, Mike's Diary, From Mike's Diary.(direction)
11. I'll ask you some questions.(direction)
12. First question.(attention-getter)
13. Look.(attention-getter)
14. Please open your books to page . . . uh . . . 24.(command)
15. Let's read together.(direction)
16. Let's read new words.(direction)
17. Repeat after me.(cue)
18. Once again.(cue)
19. Please read by yourselves three times, three times.(command)
20. Read.(command)
21. Oh, wait. Repeat after him.(command)
22. Again.(cue)
23. Please draw underlines.(command)
24. They are very important sentences.(direction)
25. Please learn by heart.(command)
26. Please look at the screen.(attention-getter)
27. Let's have a talk.(direction)
28. Today's dialog.(direction)
29. Look at the screen.(attention-getter)

教生の Classroom English

